夢想兵衛胡蝶物語後編

壹

へ13
3845
6

再編胡蝶物語序

復讎の稗史手段盡してより。まで八九年。作者そのゝ彼ハ傳奇と。趣向がいよゝ思按に綿ぶちたるのみ所為とハ志りながら。生活の二字に覊れて。筆より外にたつきなき男子一疋は足ふ稼ども。五尺の瘦と安然と日をつぶし硯にもむかひつ。烟好らしくも思ひしハ。ありけなめりの幸なりしや。されバ柴の戸を音づるゝ書賈あり。今は寡からねバ。書園と長雲繿

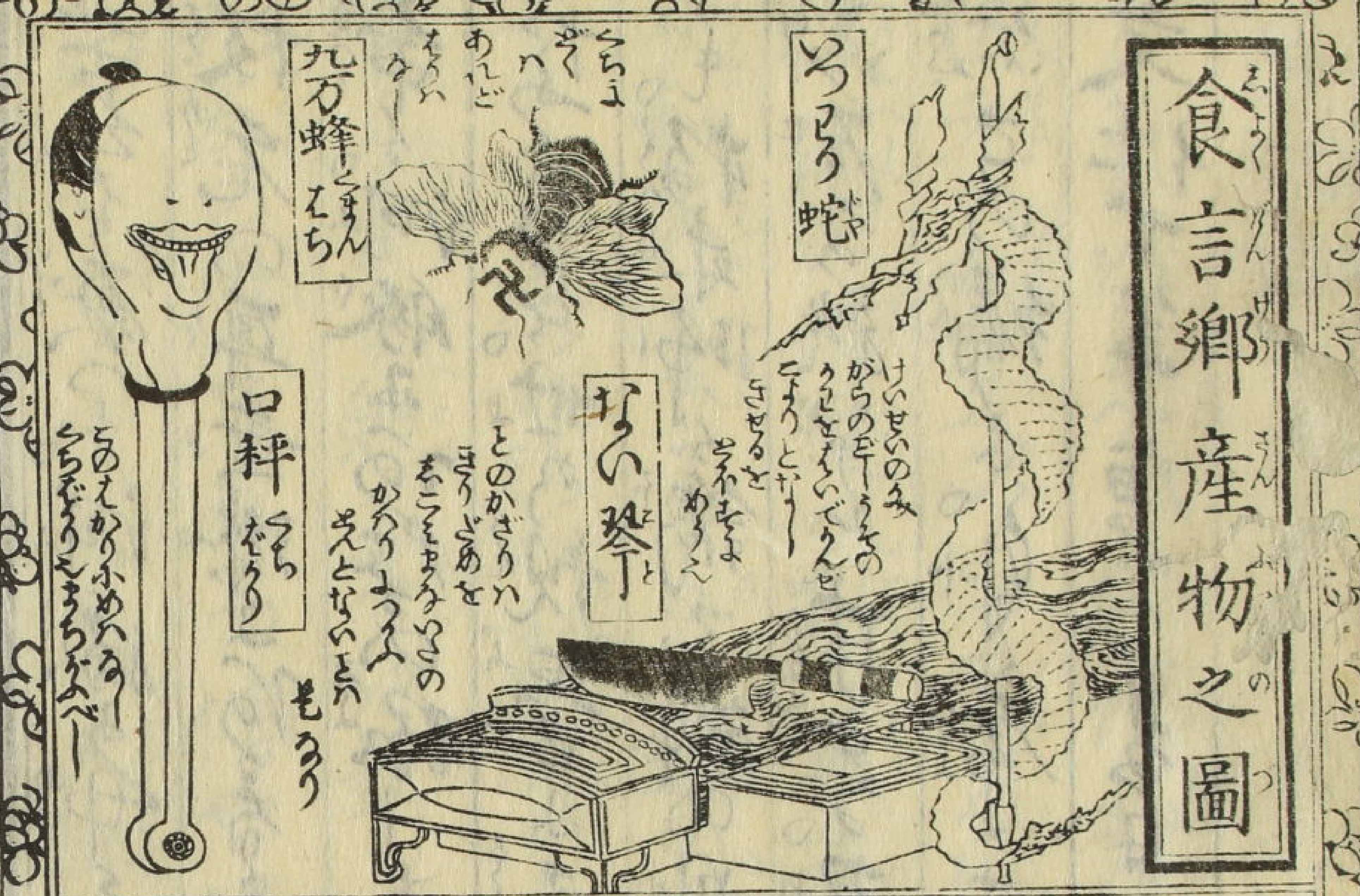
門 へ13
號 3845
巻 6

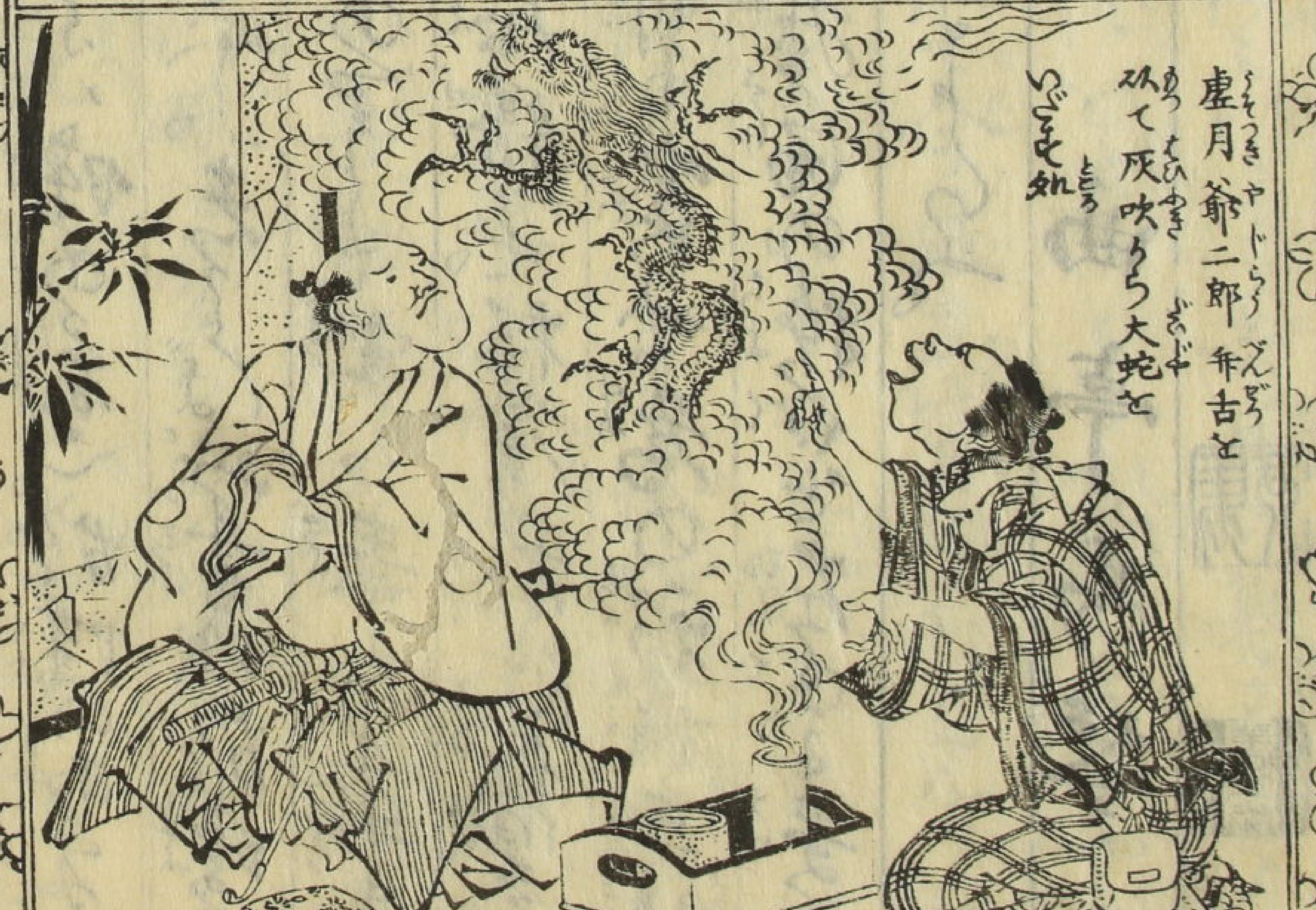
予は繪書を從く刻して附さいかがら去年の暮まへさり
と氣沢ろえて。胡蝶物語と著しゝるに落が來ら
板元の白さくハ。ことし妻めせて今茲正月のちぶみんから。
後編の催促ハ。初耳に入るものから。一ヶ日朧のなりすゞけ
日和。花曇より五月雨の。降を梅らずぞ武作墨ちの曲り形
ふもこちばけ彩べ。盆前もちや遠からん。時ハ生ぬ蕚、
本と家ふ勉て筆を起して。再編四冊を綴りて前後
九巻の冊子となりつ。信や河豚を喰むものハ。美味を
覚して毋ら紙どあど又稗説を翫りのハ。當るをおりて。
苦みを厭つて河豚に毋ふハ。蝶ある哉。胡蝶のあるハ
板元の耳垂珠よけるべし。去らば此書紙胡蝶と
命る。河豚に似たる擬しあらずも。実も毒にも薬にも
ならぬなり。世の観音に居膳して。板屋が当る花盛
うも。板木師が鐫ふ鯛の目も。穴が為の彫板三十余日。
下戸の孫づけて甘口に摩す酒の猪口を左手に受て。
薬みの編に。自序すとふ。

文化七年庚午夏日

曲亭馬琴

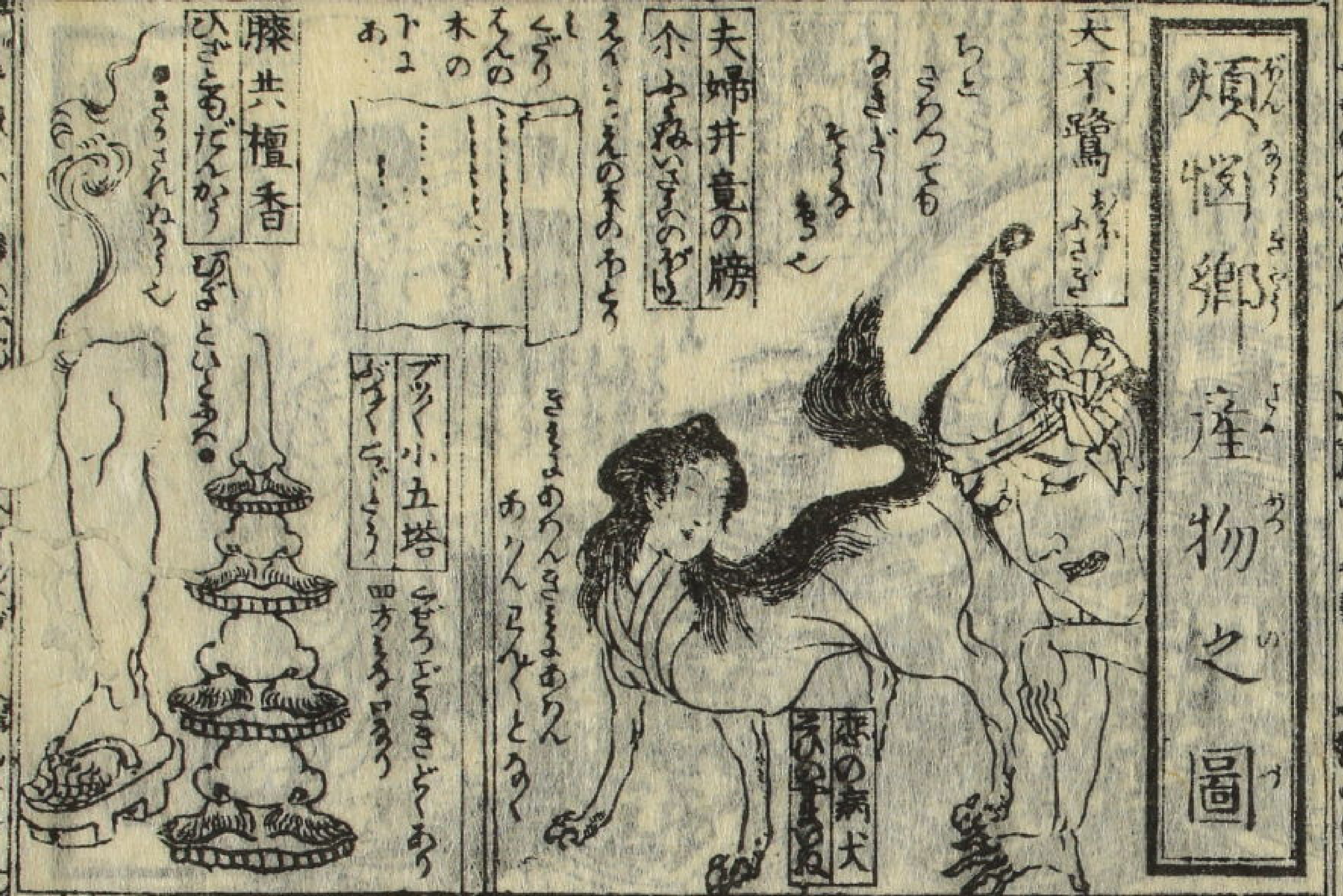
食言郷産物之圖

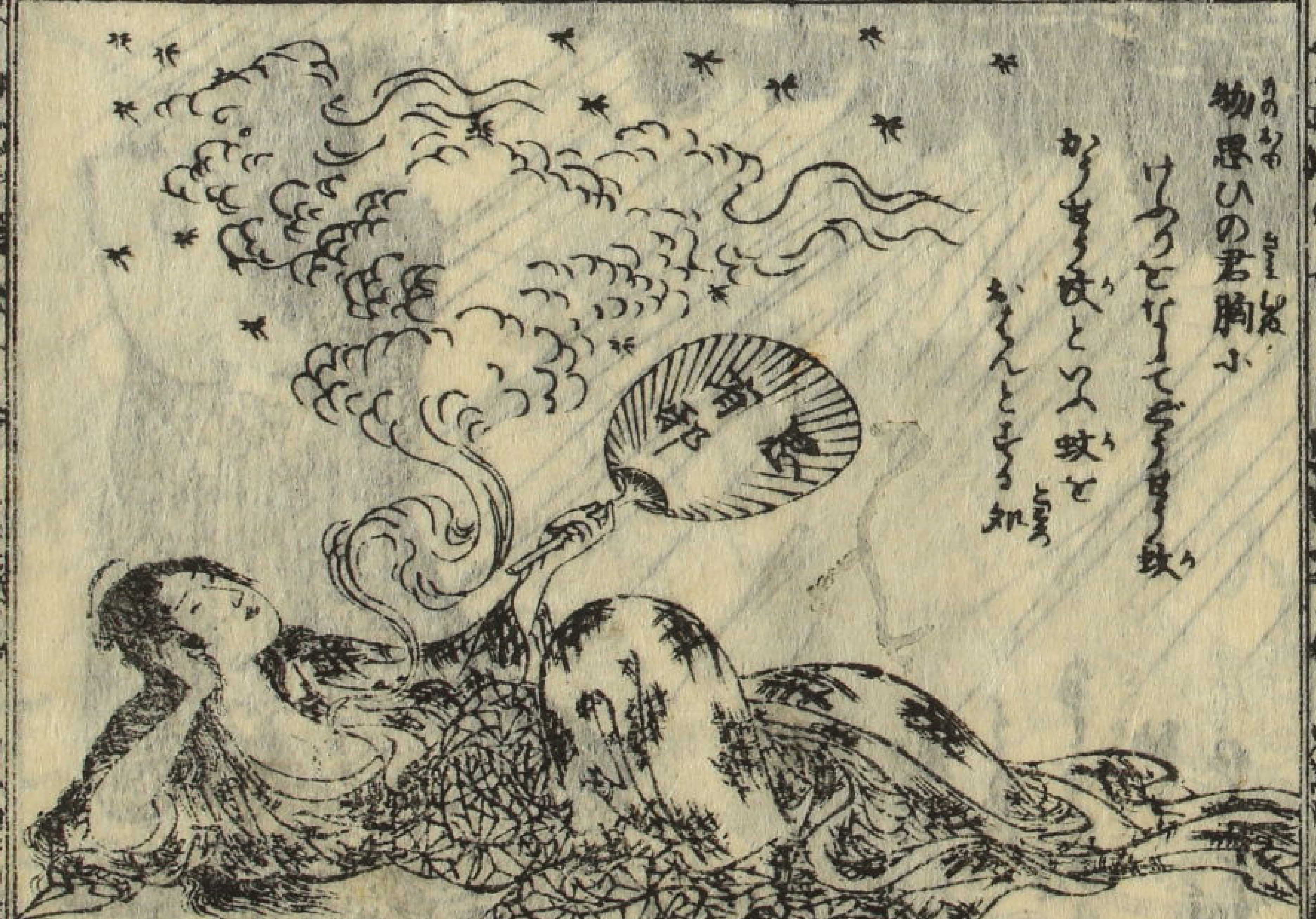

そらう蛇（じや）
けいせいの文からのぞーうそのうそをつゐでくんぜこまりとなしきせるをそれをよめうへ
九万蜂（くまんばち）
くちはぞハあれどもうハなし
ない琴（こと）
とのかざりハまりどあをあこそまろうさのかたりようてえとないとハもろう
口秤（くちばかり）
このえかりふめハるくちばかりそまちかべー



虚月爺二郎（うそつきやどらう）弁古（ぞんざう）を以（もつ）て灰吹（はいふき）から大蛇（おほじや）をいだすとも知（し）れ

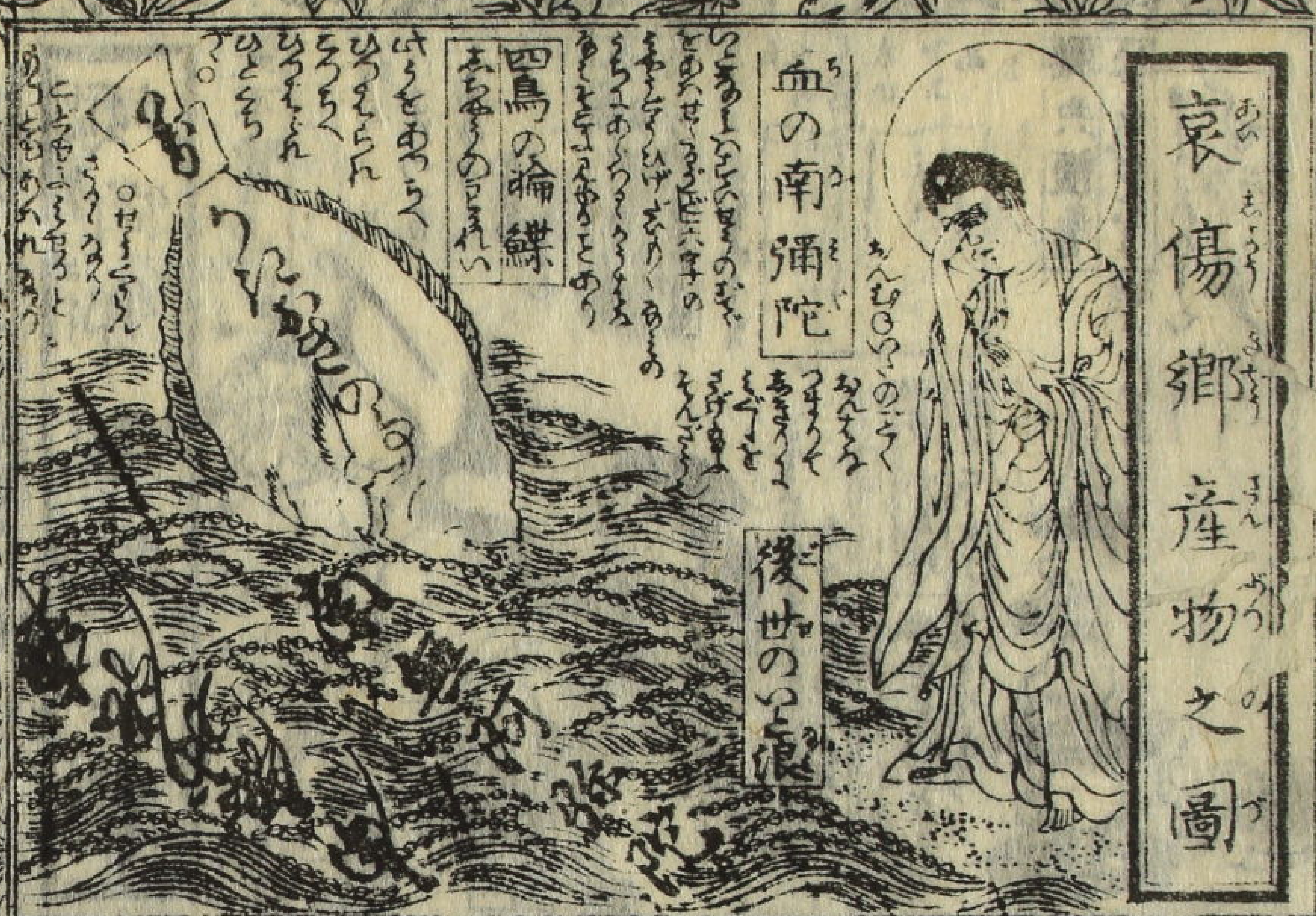
煩悩郷産物之圖

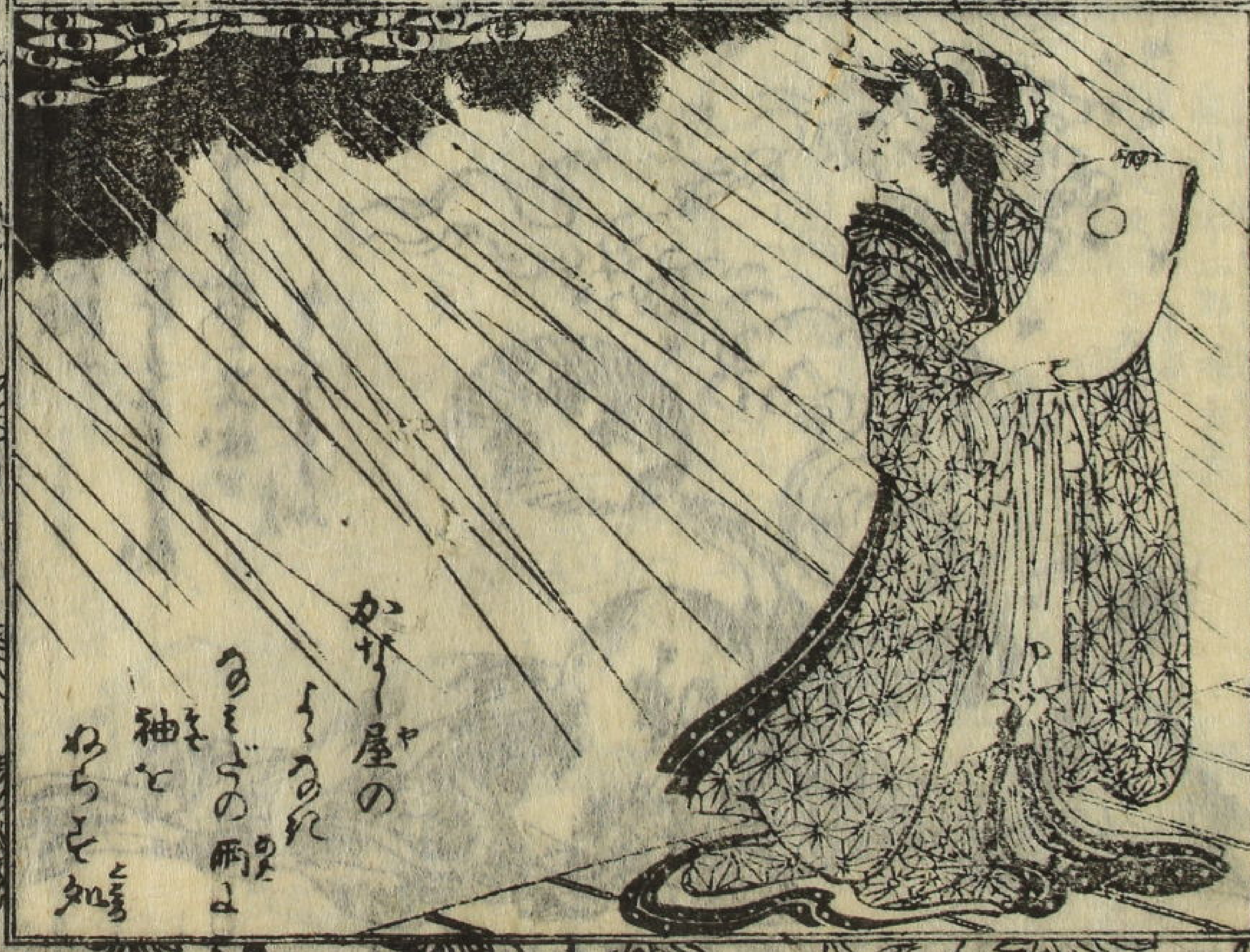

大不鷺（おほふさぎ）
ちとさわってもふさぎそうなきざし
夫婦井竟の勝（ふうふいさかひのかち）
えへこえの木のかうしくぜりえんの木の下よりあ
ブツく小五塔（ぶつくこごたふ）
くせうごとまきどくあり四方まるくまるり
恋の病犬（こひのやまいいぬ）
さまよめのんきままあれんあぐんこゞとろく
膝共檀香（ひざともだんかう）
ひざといふあり
・さうされぬなり



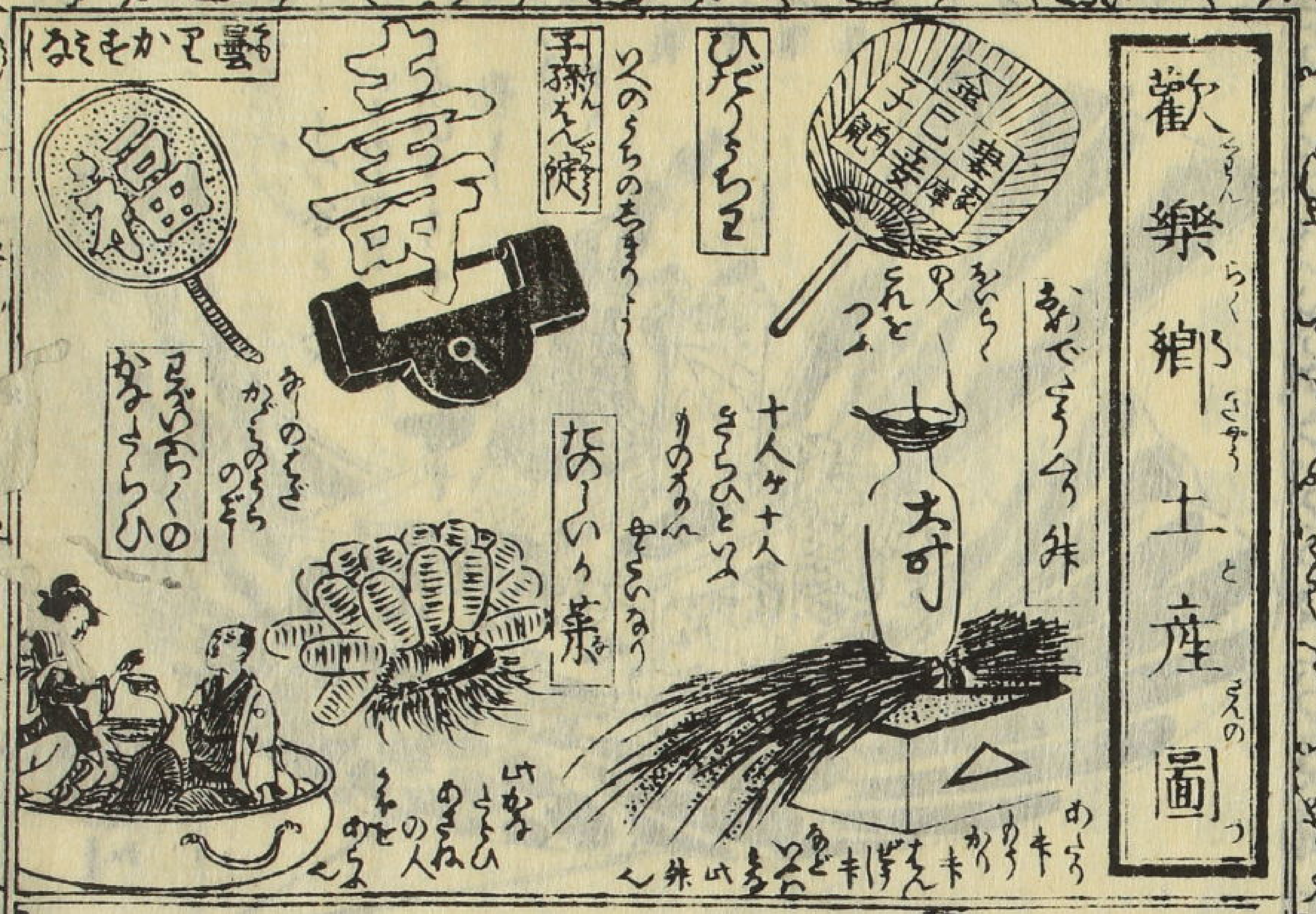
物思（ものおも）ひの君（きみ）胸（むね）に
けむりとなりてたちまよふ蚊（か）
かくまぎれて又蚊（か）を
おもんとまる知（しる）

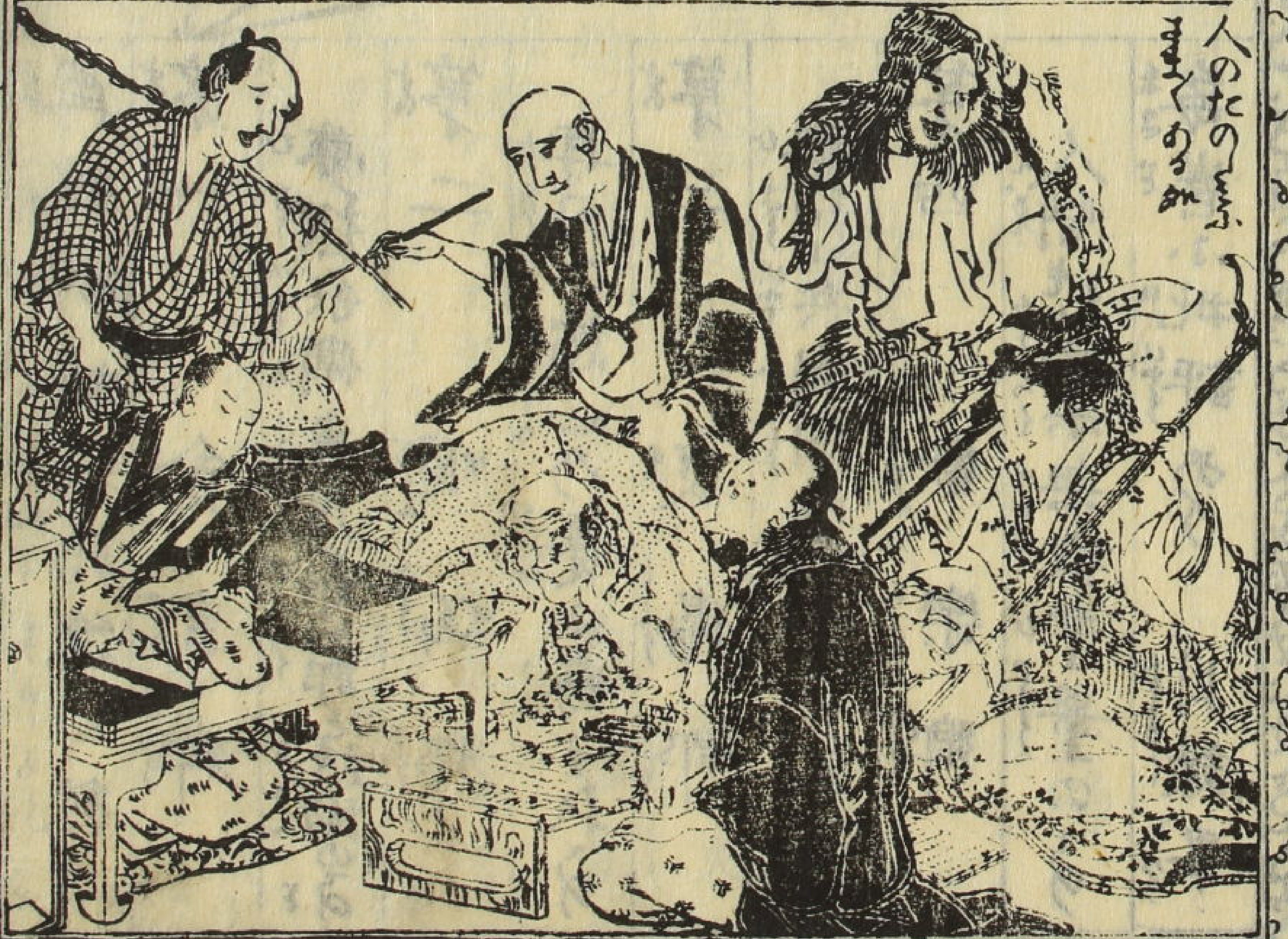
哀傷郷産物之圖

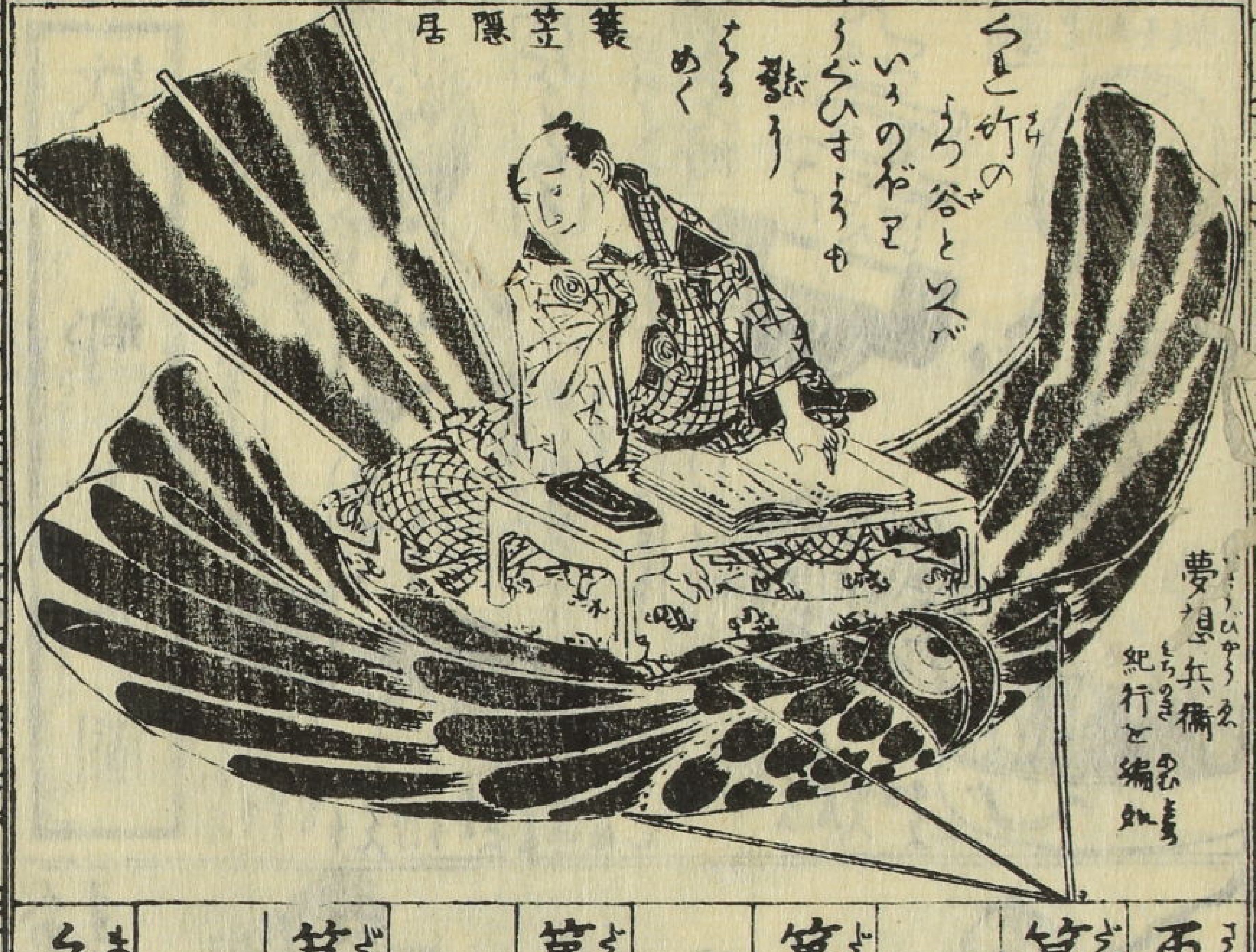

血の南彌陀
四鳥の輪縲
後世のつゝ浪


かせし屋の
しくるれ
まぶの雨よ
袖を
ぬらさと知

歡樂郷土産圖


おでこうの升
ひだりうちは
子孫えん〳〵院
壽
壺でかもかきもなし
福
まぶいちくのかまぶらひ
なのゝいり菜
十人ヶ十人


人のたの志ミ
まくのるれ



蓑笠隠居
なま竹のよち谷とえば
いかのぼり
うぐひすよりも
聲あり
なるめく
夢想兵衛紀行を編如

再編胡蝶物語總目録

第一 食言郷
夢想兵衛虚月希二郎と議論のこと

第二 煩悩郷
耳目の慾心乃憂に勝ざれること

第三 哀傷郷
夢想兵衛洞の雨やどりすること

第四 歓楽郷
人間も歓楽無數量のこと

毎巻小批評あり

目録畢

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之一

東都 曲亭馬琴戯編

食言郷

食言とハ何ぞといふ。今日是といひしども。明日輙変易せり。食言するもの。巳に吐て。復これを呑がごとし。むかし成湯の誓文に。朕食言せずといへり。夫食といふ偽なり。食言則欺詐尽て。爾雅ても書をみても是れなれば。犢鼻を引締て萬事に虚といはざる人を渠奴ハ食へぬ奴といふ人を欺ども食よが為。そのいつわりも取べきことあり。道家の虚説ハ不老不死。浮屠の虚誕ハ天堂地獄。荘子の寓言。孫子の武略。これ是世の為。人の為と。合して見れば偽の文字ハ實語なれども。浅からなるハ凡夫の欺詐。尻も結ぬ苧環の。いとし可愛の女郎の文ハ客などを欺詐を尽ねといふ。俳諧者流の滑稽可

かけらも正直正魯にあらねど。さてもそのゝち夢想兵衛は。貪婪国の大圓に。福の神の冥助によりて。種ありしふせし紙老鴟にあつかれて。ふたゝび空中へ閃き登りしが。此紙鳶えどゆふいまじて。わが意に随ふと。蘇武が雁でも。林逋が鶴でも。なかなかに追ひつくべくもあらず。小便あまだれてありて。下界へそゝぐと思へば。紙老鴟ゆくとさがつて来て。檀那どのゝ要をきかせ。登れよといへばその随ひ。ふらふらと天へ升そ。あがりさがりも。このたびはの相場とはいひながら。その自由自在なることを。二百十日の嵐にも。跣足で逃げれば列子が風も羨しからず。淮南が丹飲まくもほしからずとおもひけるに。仙人の楽をしらねばこそ。奇妙くとひとりごちて。紙鳶の背へ大胡坐。髭撚りながら呑む煙艸も。咽かなれば。あら紙鳶忘一甚麼鳶公。これはそもいかなる所ぞ。かくてつくづくと気をかへて。耳近い国へおりよさぞなみ所へ。おろしてくれよ。しのそこおれと通し。嬌に驚し。昼食すぎの旅の寝が。小休息でもするやうな

口状。一体理論がこの本の。作者の趣向であるゆゑ。無理なるうへの檀那どのと。さふもふくねをもち。紙鳶は非情の造物なれば。其処まではしらねども。吾澤それは彼此とすかりからそこで名を大きなる浮誕とつけ。ふらふら食言郷へぞおろしたる。元来うそでかためし国ぞや。ちからいひひろめて出放題町に名も高く。虚月弥次郎と喚ばる。野鉄炮の師範なる浪人どの。表借屋臺野万八といふ旅店に宿とりて。はやくこの地の形勢をきくに。利慾の為に恥をしらぬ偽をもて世の人を欺く紙世事といひ。或はこれを愛想といふ世辞のは浮薄の別号にて。歌作は論談の楽屋なれば。人の女房をもしなべて。御新造さまとぞ称せど。蔭では小指のかゝあのと嘲る跡から。ひそひそいひ坊さんおいでお娘さんとく。お鬢ができすぎると同前の叮嚀態も。この中まで彼餓鬼と。女傭めかつけるさへ困り果ることぞ。かくてみなとどもときめく生ざかり来る何日其所其首へ。のみ

お供を稼ぐひまなし拙者かくよりお誘引まうさん。と立派に約束しておいて本日になれバ音もせず。程経て逢へバすらぐくと。彼日は何やら故障ござつて。火急の要事にとり紛れ。近年の御不約束と萬るの欺詐なく闇をあつられバ。おのが奸智に引くらべて人を疑ふを妻し。習が性となるものなれバ。子を教るとなども。代囲にてかかり。おのれのまへの金剛寡てちよこく走り忽地に跌き輾ぶ稚兒が。その倒れたると泣出せバ。母親遽て走り出坊は強いぞ。金を拾つて泣なくと抱き起して。すざく金紙拾ひもせぬに金を拾つてさとの親の欺詐をしりつゝ承知して泣止む三才兒の魂百まで金といふ字に痛さを忍べども。されバ親の教による。泰平の世は夜戸を鎖ど。途に遺金紙拾つるとよ。堯舜以来乃通り文句貧しても心清くばこそ遺金を拾ふべき。金を拾へバ大きなる厄を送るものは返すまでは。それぐの國法あり拾ひて人に告しらせど。おのが懐抱へ納

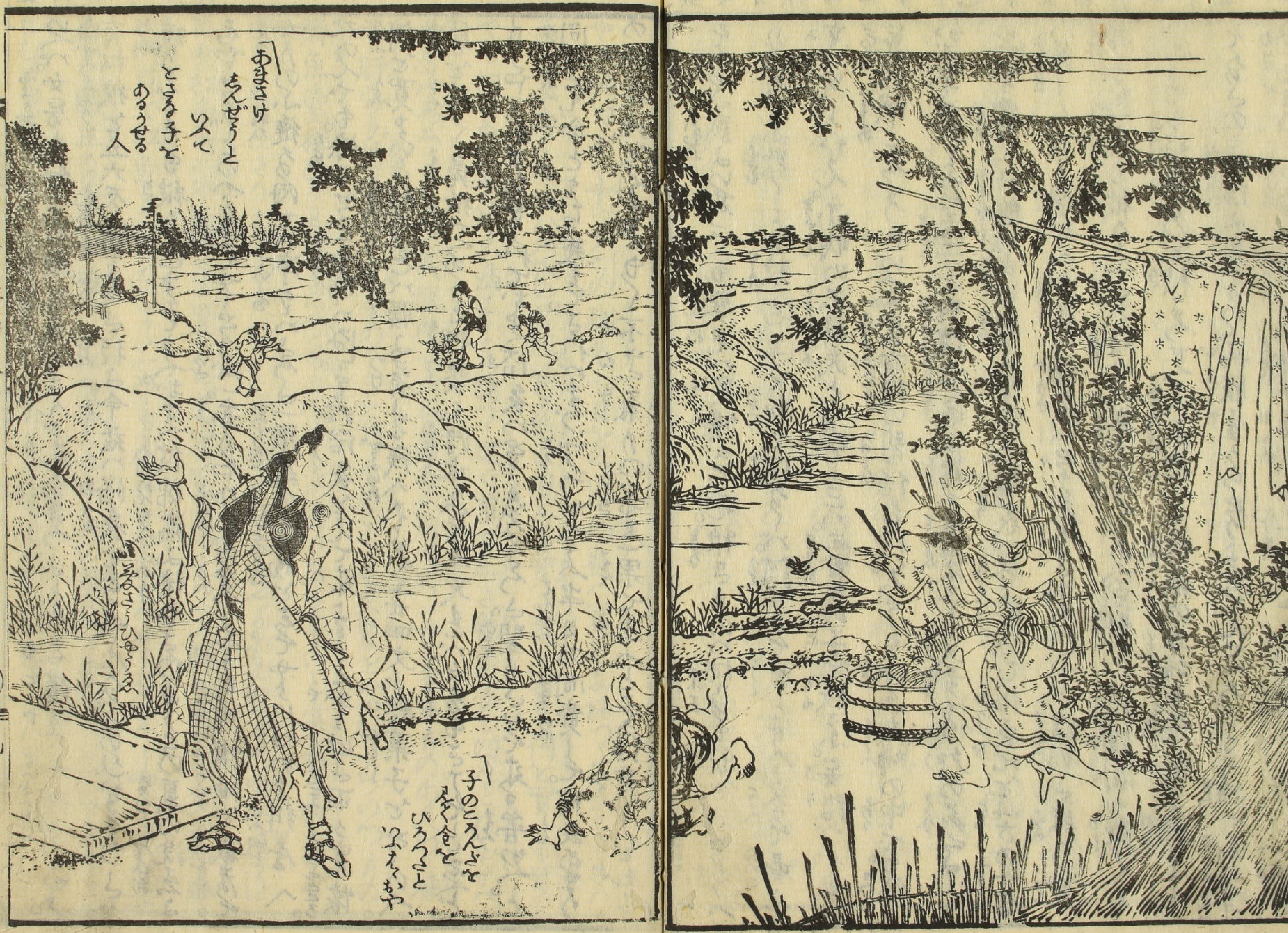
むれバ。忽地天の咎を蒙る。送しずりの念ひでも。始終其金が身に著べきや。金を拾ふは禍を拾ふに等しと恐べきに金を拾へと教る親の欺詐は。その子を捨るに似たり。とはいへこれらは夢想兵衛が氣にはさらく容ねども。福の神の教を守りて面あてにはいひも懲らさバ。苦しげに主を見捨て又先の町へゆきて見れバ稚兒携る夫婦抱山母親が背らぶ。附紐そくてあるそれバ善くは向ふへ走り抜け。とまでござれ。醴しんじよと囃しながら手を叩けバ稚兒は真実に醴を飲むと思ひ。荒惑して走り来れバ又又六間引退き。醴しんじよと呼たてども。醴を飲せねバ身にほかれが来てめそめそ思ひのあぐべうら尻餅撞出して破瞳泣しそられ。母親すぐて引抱へ胸ひろげてさあ飲めと矢庭に乳首を含ませられバ忽地に泣止ども。そのものをたれぬめかめ。乳汁を飲そといふさへ。飲せぬ醴で導くより。親の信といふべけれ。乳汁は五月飲

韓非子巻十一曰。曾子之妻之市。其子隨之而泣。其母曰。女還。顧反為女殺彘。妻適市来。曾子欲捕彘殺之。妻止之曰。特與嬰兒戯耳。曾子曰。嬰

さもれのあそびじらひがらねバ禮と欺く。ゆゑ子ハあるけど。その偽と利欲とりて稚きものゝ道すぐがら大きくなるに随て親の詞を偽と見るれ覚れ。親を詐る何とも思はぞ。されバはじめハ親が子を詐し後ハその子に親が詐され。あしきあそびの志おこりて本銭の財布空くなり。身上の大黒柱へ大きな竅をあけられてやうやく夢の覚る頃ハ其とち。所詮親の手にも叶ハねバ勘當と思案を定め。初度ハ長屋へ世話を被。親分が招ぐ長口上。惰奴といふへ偽り信へ可愛い子を捨る浮世の藪の藪医者ハいふもさらなり扁鵲でも匙を投る身の腐爛ハ切れども断まらぬ凡夫心。かゝりても暁らぬものゝ多し。むかし曾子の内儀が市へゆくに其子跡追ふて泣しかバ母足手を嫌ていひけるハおん身大人しく留守してゐよ。彘羹烹て食さんといふに曾子これを聞て彘を捕へ出で殺さんとせられしかバその母遽て推止め。あれや戯でござんすといへバ曾子ハ眉を顰。

兒非與戯也。嬰兒非有知也。待父母而学者也。聴父母之教。今子欺之。是教子欺也。父欺子。子而不信。其母非以成教也。遂烹彘也。よの[illegible]

それハ戯にいふても嬰児ハ実情に思ふ也。稚きものハ何ごとも親を見ならへものなるに欺くことを教へんや。子を欺て信なくバ何をもて教へとせんと終に彘を烹させしとなん。亦明の王穉夫といひしひとハ。三世その子を教ゆるに。妄語つくことを第一の誡としていひ食言郷の習俗なれバ。ちぎりを深き夫婦の中でも偽りかざるものなしとぞ。孟子に所謂妻妾に驕る其人宋子も又多かり。夘の花ざしもめつしき雷て。杜鵑の声も耳みなるところ。隣家へ背負込む浴衣地を此方の女房ハ羨しく。旦那へ今茲ハ浴衣ハどうしなさる。あれほど流行る麻の紫鹿子を一度も被たのんぞと呟けバ。亭主も聞もあへぞ。髭撫ながら浴衣が欲くバいくらでも好なものを被さしやせん。去年拵へた縮緬の単物も。俺ハもう倦たり。それのこの寝纏にするがいゝ。呉服屋から来ぞと。見てハろくなへ持て来ぬ翌去日のうち履て穿出し。ぬる浴衣を見せてやらうと當もなしのいゝ栄を


あまさけちんぜうといふてとさる子ぞあるうせる人
むさうひやうゑ
子のころんだをよく舎とひろふといふえくいあや

燕石雑志巻ノ六家訓稿餘の條下を併せ見るべし云ふハ但その説をひくのミ以下本文を挙ぐ

いへバ。女房もぬからぬ顔。近属母さんが来なさつたら。名護屋へ幸便があるから。有松絞を五六反誂て遣さ往よ。今茲ハ浴衣をどうやんなどといひなさつたが絞りかぶりも被らしますまへ。おまへ彼綿縮に倦なさつたとの夏の洗晒をあやせうといふようなさうぞ。前のや巾室の雲ゝねらち。可惜袖を裁落て女りのふ縫なの母せが亭主ハさつさ二張羅の単物をきそせられ。口ゝ絹屋へたのんでも染させる木綿ハなじさうぶ浴衣を見て来ようと出かけたが處懐何を買ふと好なのをバ腰よ着る銭入をなへて廿四文が乾菓子をそのへ。袋を捨て鼻紙へくるくると押畳ミ。汗水ながして立出へまバ。女房もさてそと思へど。めしやとむすちせられて。おまへ浴衣ハどうなさつた。翌めさせて来る着かへと問バ莞尓とうち笑ミて。されバまづ寄つせて半日の間費して。百反あまりの浴衣地を見たれども不定氣の呆果て立ハとされバ菓子を出させやら。酒を出させやら。又この馳走で日をくらし。浴衣ハ買ずよ帰つてござんさハならまハ。去々年迄ハ大枚の呉服物を絶ず現金よ買ふ花主でも何を買ても買ハでも。何日も馳走をしてなさと。いひつ途で買て来し乾菓子をぽんと投出せバ。女房ハむつと見て。呉服屋で出させ菓子ハ版で押さやうな安ものあるへいつ嫌羊肝なら。些ハ會る来もあるとこのもも最むよ足衆といへわうらいつめの鮮魚賣。挿ひが口るんと思へどあれやんざく素通りもなるまいと索麪を推あげて。小さるのござりやん。ゆくへいぐとさ。覗バ亭主まづかふ見かくりで鳴手遅り自今松魚を二本買ふよ翌又どぜう買てやらふといふよ鮮魚屋苦笑ひ。今茲ハ河岸で松魚といつてハやぶ一本も見かけませぬ。どんざとをあつしうといへせもあへぞ膝立る母し。今時の初松魚がとなさえの目よ入るものかと只一口に母りこもるかざく見え遠く欺飾とへ志達ど。腥もの知つく悲しさハ耳を掩して

老ゆく。夫婦の間がらに見栄をいへバ他人を飾さするに工夫を凝らし。大晦日乃帳面も勘定合て銭ハ足らねど家に勝る松飾に。人足五人の手間を厭ハず。夫婦ハ季秋の俗で居ても。仕着せの絆天花やかに家の號を染させて世間と飾り身の請緊させても。なにさけ借ん設計ぞかしや機関の糸も切れ一術計盡て尻尾を見られ。残るハその皮財布。まだすまぬ口ハ達者一寸もせぬと降まとへバ屑怪に猿あり人の子を見るに遠く離してお娘さんハ愛敬わのきこそ黒けれ目鼻だちハお奶さんに生肖女子の疱瘡ハ為のかまくなく。可愛しいものしれねとやがやかの人と流石ハ老切乳母ハ痘くども傍痛く痘痕あらべよけれども。択楓にきやくあけさ鼻の穴までおぶりれそめて待や合ひむもめ。ちうとろそのお乳で八婦に要人もあるまししとんだお子の乳母するとは実に肩身かすびするとさい顔にまれ

そりや癩人の瘡がらを。山吹色へ刻印を打せそござる檀那どのゝ其御前によあやかつて。玉面でも大るのない守袋へぶらさげる。迷子札のやうなものが。沢山あるから。喃娘さん。阿爺が人形おげしませう。翌又お出と捨ぜりふを子供ハ正直なまうけて。それから額をみるよびかけ。おまへ人形ちゃ見るでないか。お母さんあも紙鳶を張ておげよふとのゝでお瀬しぶね。と耳の端へ鮮のある往々されても。なけまやあおまやあ。人形ハ出来ませず。またが衣が出来ませぬ。阿さうして去年ハ大誓文此度ありしませうがつさら。阿爺を志つてゐるおしろいのうさいと説さらへに又紙も當座よりのでたらめ口状。俄出への兄まつりし。女子とみへれバ論をかけてあハせ積の平一面。おまへ芝居がお好ならバ。ましてかしくであれど。三階でも表でもならしハ芝居が幅がらなりつ何時でもお出なさる。そのさん残も合もいるとおやござりませぬ高土間でも鶉でも。近い処でおふりなさいやうにしまする

と歓せらるべくいへバよのやはなかり。有一日朝から三人連。あアが寝衣へおん出なさし。あまり度々ゆ深切よいふてござりまするから。ゆ厄介よなりませう。どこぞで見せて下さりませといふ声。耳へうんざりもすれど。そうさね顔をまづ洗ひ楊枝こそく歯を磨てまづあすこへと坐敷へ請じ。何ぞ家々と耳こそり。舌を出しての笑つこり。尻をもぢくさする女中を。四ッぢゃん追居廻らせて亭主ぎうぎくまって出せり。いそがしくお出なされすまふハおらのしく。杜若も三津も三朝も。三人ながら病気もおそろ代ってやとおらじやァせ。勿論この舜の大入突かけて八桟敷もなけれど。それハぞうともいつでもまする。がこの三ねを御覧じませ。闇の夜ともいながら。月見よ行さうなものの。いつそ気のきりまませり又八夏から閑帳へ。お来りなされてお悔みなさる。二三月の中啼乳して。お迎ひぬ来しまぬといふて三人顔見あハせ。腹ハそぞとも流石ハ女子ども。狩き出入もせぬ。それハ実よ折がわるふしてぞんと力が落ましたまあ来つしこと其等さへお構ひなく。ハ。お見せなされて下さりませとそれからハ年倍ぶけぞの尾よおう気。涸気。松葉。八丈あろとも。ふ蔦の紋え根が生て脇る氣色のあらざれバ。楊枝挿する天窓を掻きゆかのつとまでハござりますれど。そもおかふうけるのふ。肝腎の立めのが出ぬをまあ。つ連よそする八何とや縡乃欽さ穿鑿もあゆかぬとなされ。中世須田生まし。新店よ奇妙な手打がござりましぜめて蕎麦でもあげまして。とそく家々ふも合鎚うさせ。口で跳る安諾八百。武朱ふハ足らぬ二本棒。鼻毛よままし。と。中ゝやと面色変りもどせんろさなく。立まもあくもなく立あがふと。遽しく推とめぞんく似て我なりまでよ只今お出しまうして八可惜蕎麦をかつ絶まさ。誰ぞえせまゆよん一せ入め来る客であなぜ遅いといへバ女房も如才なく。新店なれバ女が

まわしで遅いのでござりませう。今見せにやりましたに。何をしてゐることやら。一処に連て来ましたらよいにと。ひとつ台所へ立てゆく。あつらへても来ぬ蕎麦が。一日まつてのまれべいとて持て来るよしはなし。そちこちするうちにや亭午ごろ。肚饑くなれる腸は冷むど。三人一所にそろ小便に閑所借るがよん見え員にそ。胸のこねへ合し宮せこの紙入出して締るのも二重純子におよばねども。此上はふくめる服帛帯。送り三重引残り土産の餅菓子一重を携へて小事日約ゐまとてかへるまる老母さい河豚汁に啗く風情にそ。供の老僕に面目もなき出しさふる日和瘁降ぬうちにと立帰る。跡に夫婦は目を合し。ぞんざいものが志けこんで軽くう大さふらくと甘られし。土間で見ても腰ぐるめ三方金で追ひつかぬおそれど。と咳けば女房は苦しげに。女とみると目がるのいから。如才もなくてそんざめよあべべいへかなめへせぶと地綱を生しるおちか口状。

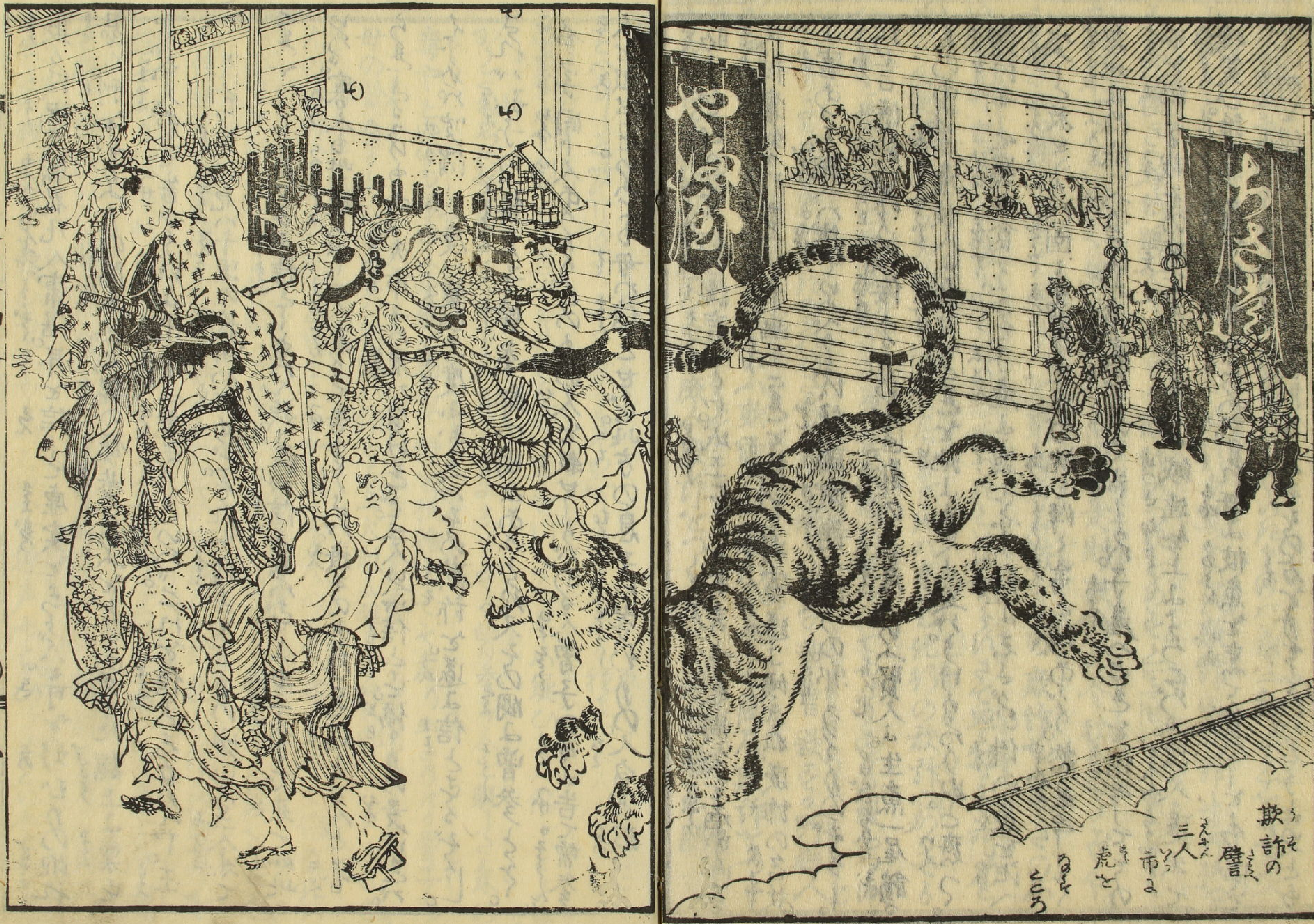
元是なつかりが実情にして。すべてその國の習俗にそ。植をとつて庭を掃き母屋の塵をとるも紙の勢とするもの。不浄潔鉄面皮の徒とのみよ犯人しく嘲哢に。られは論よりのむら私べ。世るのがなんとて数にも入まいぞ。その見識の卑さよ。野雪隠の庇のごとく。請合口状あてにするべからねべ。小便所の張札に似たれど。世才に長たれば。金銭などはよんずめうらこまかづくいゝて承知させ借ても返さね。ものなれど。欺詐を歓ぶ國風なれば。互に郷し誰さる。約束変易を専とする。ある人。先日の返礼に。こまごくの品を進上いたそ。それは近ごろ忝いと礼をいはせて。その後は噯気にも出さず。握り拳て催促すれば。さやうなこともござりましたさうなと。とんでおみやすしるましべ。虫乾の節見えて進ぜう。と戯けて挨拶。これてもはてのねど是にも懲ず口あうりの。よん方へ足のむくは。赤是一つの不思議く。夢想兵衛しを。さんざ毎に呼く毎に傍痛くいゝてのけるものをなれど。女子と小人は養ひ

ごとし。と心にまた戻して欺きぬ用心するより外にすべなく。今茲も暮て新玉の年のはじめになりしかば。有一日虚月爺二郎が門へ紙牌を出して。明日欺詐のつきそめ。ただし浮蕩執心の輩は旧来盛る仰ぐ所なりと写しければ。薮黙兵衛ハ果を果這奴ハこの国第一の口利と号するにいかなる欺詐を尽せらん時こそあれ。われもゆきてそのものを説伏て食言郷を立地に老実国となさんぞ。と持病瓶頂に再発して。悪を逞しくより徒に早旦より支度して。爺二郎が前門に行てみれば門へ鎖して人気なく。今日休行と紙牌を出しけり。こいつも以の外と好びし果きて。けしからぬ奴哉。さては爺二郎こいつめ紙を見ても猜して竊に恐れ。室居をつくるとおぼえたり。憎さも憎しとひそかにまはって背門口よりさし覗けば。宅の戸を寄かけて。あるじ爺二郎は室にありされバこそとて遽しく戸を開けて至るを入り今日欺詐のつき初と

らけぬわり聴聞の為推参しけるに。前面には休行と写して鎖してあるハ心得ず。其ハ日本国の旅客に薮黙兵衛といふものの吟りやなが去年より臺野万八が旅館にとまれど。こえて一句も欺詐つかざりしが來べきとや。とてかの集会をこそくと止めにきけるにハやいのぞや。抑こちが神国の風俗を。責を賤きをしるべて正直実義を旨とせり。彼三社の神詫といふものの。おも欺詐つくものハ守りあらハぞとあり。されバ菅家のおん言の葉も。「心だに信の道にかなひなば祈らずとても神や守らん。と吟えめふ志るるにこの国人ハ。浮蕩にして偽多く正直実義といふことハ兎の毛で刺す程もなし。其故くこのその氏数しくそのあまり。かの集会を幸ひに。利害を説て佞人共が酔を醒させんと思ひつるに。かくてハ手ぬ失ふに似たり。偽るものハ惧るとあり。先生これを惧るにおふぞれ。あとて居るすがら門を鎖して。かの集会を止め

ぬくるものなれバ似せ卑怯しと嘲つくぞくいひければ。夢二郎これを聴きてぞ。呵々とうち笑ひ。おん身いまだ欺詐が実をしらねバ。欺詐の欺詐たる所以をしらんバ。僕このみ紙鮮を出して今日欺詐のつきそめしと写世を人実なるとしりて来てぬしが門を鎖して他行と写きぞ。是則欺詐の尽初なりとぞや。りしきのみ題せしごとく。今日人を集へるに誇る所欺詐しとも云ふさのふいひし所実なるとなれるが。かくてハ忘語つれとはいふべからんバ。さて早朝より門を鎖して他行と言ひて。室に隠れ居るがごときハ。亦是他行の欺詐ぞかし。いかでかおんみを恐るべきと。執範が夢に夢想兵衛ハ。堪へかねておどりあがり。現に其迎ハ音なきごとく。欺詐つくるなれバ。さもあらし痛しいかなる若曹欲する所狂人ふ斉一。巧言令色鮮きを仁といふ。欺詐ハ乱離の本にして。国君欺詐をつくる時ハ臣妾侮り。民従ハず。士庶人欺詐をつく時へ。親族離る。朋友

助けず。むかし管叔の流言つくりや。成王これを実言として。周公を危ぶめし。又彼褒姒が巧言つくりや。幽王これを欣びて。周室遂に傾きぬ。欺詐の名数に害あること。数へハ揚ていふべからず。讒諂諛諂ハ詐りの邪なるものぞかし。巧言浮説ハ詐りの佞なるものぞかし。鄭の子産といふ賢人に。生魚一尾饋るものあり。子産校人に分付て。これを池に畜へといへバ。うけたまはりぬと応へつ。濃汁にして竊に食ひ。さて子産に稟しけるやう。仰に随ひ件の魚を池へ水と放せしが。圉々焉としてまづ沈み。洋々焉と浮あがり。悠然として忽地に淵底へ入りてゆくと。老実に申して告しかバ。子産ハこれを信として。その所を得たる哉。その所を得たりと。滅法無上によろこびける。校人退出て冷笑ひ。誰か子産を智者といふや。これ既に彼魚を烹て食ひしをしらずして。その所を得たりとは可笑々々と快せしとぞ。その方をもてすれバ君子といへども



歎許の譬
三人市に虎をなすところ

欺かる。況て闇君凡人庸俗。耳を信じて虚実をしらざれバ。奇を好むもの謀れ易く。利をむさぼるもの陥いらる。魏の龐恭といふをとこ。あるとき魏王に稟曰。今人ありて告まうさバ。市中に虎ありといはゞ。これを信とし給はんや。王うち笑ひ。虎ハ千里の藪にハ栖めど。それを信とするものなし。又二人来て如此まうさバ。王信とし給はん歟。されバ信とおもはずとも。二人まで来て如此いはゞ。寡人も些疑ふべし。三人来りて告まうさバ。敢そのときこそ信とせんと答らましゝるのもあり。夫市にハ虎ハなけれど。三人いへバ信とせし。偽の畏けれバ。ひとたびめハ聞消し。二度ハ疑ひ。三度におよべバその欺詐を遂に信とするぞかし。されバ孔子の一番弟子曾参。鄭の国にあるとき。又その国に曾参と名字同じ人ありしが。そのもの人を殺せしかバ。ある人曾子の母に告て曾参人を殺せしといふても母ハ信とせず。此方の息子ハ孝行もの。人など殺さとハなしと聞ながら布を織てゐたりもせざりける程に。又一人走り来て曾参人を殺せしと告ぐ。そのとき母ハ耳を引そて。半ハ疑ひ半ハ信じど。かうさゝやくうちに。又一人走り来て。婆さましらずや。曾参が人を殺しゝ。気の毒や。といひも果ねに母親ハ周章杼を投捨がてぞ走り出ける。曾子の母の賢なるすら。三度の欺詐ハ信とせし。一犬形に吼るときハ。郡犬ハ声に吼ゆ。人の欺詐とハかゝることをやいふなるらん。つく〴〵人として信なきハその可を知らず。車に輗軏なきがごとしと聖人ハ宣ひき。将君子ハ詐を逆ず。又信ぜざるを億ず。人信寡けれバ。その言遂ひに行れず。浮薄の耳を搔ふぢり。便佞利口の舌を搔さし。己が言ふにまかせ。一生涯ハそのくと席薦を敲て説諭せバ。爺二郎頭をうち掉て。置まのく。蒸鰈の背に目乃乏しき親を睨し報ひなく。ふためといふを連声なく。ひらめといふとハ不孝

の子共を懲さん為の古俗の欺詐虚誕でなけれバ世ハをさまられぞ。商人の虚誓文も妻子眷属を艱さん為。此品類ハゑんゑけだんゑり。買ようもやく損じやすきとのふてハ買人がるのいもゑよ。やざく粘で固めし物を得要むれと偽るも。ミな是直との相談ふして安からふ又ゑるかられハ。いハむとまう一文とし。百損するも買人の好く施すといふとも罪ふハあらぶん。なるべく世界の人情ハ偽りを欲ぶし。然ていつバみるいしもの。傾城狂ひするものあん施さ私バ身を施さるゝがおめ諸いものなまじバすそ身とも家とも忘る。小十人の客十八なのがら。女房やそく惚やすくごといふを妄言とハ志るあぶ。なれされバとて傾城も。欺詐なりつくものふハあらじ。偽の中ふも眞あり。その中ふ偽あるを。陰陽といひ虚実といひ。手練といひ。手管といふ。陰陽虚実を自然の道理水ハ火を滅すものなれど。水氣ふよりて火氣を倍す。雷電を

見てこれをしれバ又火を以て水気を引く。井戸堀ものゝ知る事也。しかれバ実にも枝葉を附。頗虚誕を加味すれバ世俗の耳に入る故に。故事も口碑に残るなり。孫子に兵ハ詭道といふ。詭ハ詐也欺也。又違也異也。敵と戦ひ城を落すも欺詐を上手につくりものハ必勝すといふ事也。漢の孔明。南朝の楠なんど忠臣とて物ありげに參まじもその軍あるを守けバ。みな詭の計。詭もそこ欺也といふものなし。されバ又物の本。史傳記録に虚文多く。左氏傳国語史記漢書比校て見れバ異同あり。舊事紀ハ古代の塞ものゝ。今写本ある。日本後紀ハ書名のミ。小説野乘に至てハいハずとしれし虚誕なり。さればにや古より斉諧記。山海経も妄誕らし。英雄人を欺けバ呂不韋が虚誕ハ呂覧のごとく。趙曄が偽ハ呉越春秋。これらハ遍く秦漢物。干宝淵明が捜神記。段成式が酉陽雑俎。唐から虚誕ハ流行とてひとつの人も

假名物語。竹取なんどハ万葉の歌から虚談をつくりひろげ。美福門院を諷てハ。玉藻前と謂をつく。源氏狹衣以下ハ。搆ていゝまぬうそつきの。筆とて世の人珎重まで。虚談でも昔のものとバ咎めず。今つくるうそをいとふ。笑むるぞ知らね。具く古書の虚文をいはゞ。むかし唐山堯の時。日輪その数十ヲ出せり。その熱さハ大暑中に煎餅を焼く類ひにあらず。万物焦き焼しかバ。帝堯弓に箭うち刻ひ片端から射おとしけれバ。九ッの日輪ハ忽地隕て跡なく滅。残る一ッの日輪のミ朝に出て夕に没るとハ。宛るのもなの大万八。夫人の弓勢ハ百歩の外に及びがたし。天の高さハ九万里と大約にも推しつめるに。堯ハ聖人なれバとて。九万里先の日輪を。射て落されしに答ハ匹。或ハ羿が射させたりといへども勘定ならず。加以日ハ火也。一把の薪を燃して。強弓の人これを射るとも。瓶くその火が射滅さるべきや。天の火ハ地の

火に似ず。これを射んことハいよく難し。或ハいふ九ッの日輪ハ烏の妖精真の日輪にてハ匹。只徳をもてこれを滅そのミ。蟇目鳴弦これなりといふぞまさしく大虚談也。彼九ッの日が贋物ならバ。萬物ハ焼焦されど。叢で燃さ鬼火に草木少許も焼ざるごとく。この理に由て推ときハ。熱といふも又虚文し。是を真の火にするときハ。火と水とその性も匹。火を射て殺て滅さまこあらバ。又水を射て落さん欤。堯の時に氷逆流して。民その害を蒙りたるに。帝堯なんどて弓箭をもて水を退けざりし匹。水ハ空に射べからず。或ハいふ日ハ気也。聖王万物を憐むを。凡常にあらざれバ。その箭ハ天に及ばねども。精誠その。て九ッの日輪を消しなりといふ。夫聖人の精誠をもて九ッの日を滅さまあらバ。洪水をも又精誠をもて。忽地退けまへさるに。その手際日を滅に似たるハ匹ハいふぞや。又禹の水を治るに。七年にして功を終ぬ。堯も禹もまる聖人也。天ハ

遠く地ハ近し。しかるに遠き天火を滅せども。近き地水を退け得ずとハ。聖人の徳も又均しからぬ所あり。その詐偽拙てしるべきものゝ。これらハあまりに聖人乃徳の高きをいはんとて。却実を失へる。ゑせ博士が拙き虚誕也。或ハいふ周乃武王殷紂を討んとて。孟津を渡り給へバ。風波猛に吹荒まして。王舟反覆らんとしつくりしかバ武王左手に白旄を執右手にハ黄鉞を操て目を瞋らし、さし麾き。余今天が下にあり。誰かわが意を害ふべきとよばゝりたまへバ忽地に風波収りしといへり。これも虚誕也。夫風ハ天地の気也。風ハ天地の號令とす。武王ハ聖人紂王ハ悪人聖人ミづから残獨の紂王を討亡して民の塗炭を救ひたまふに。天などて悪人の紂を助けて聖人の王舩をしづめんとハしたまふべきらん。しかるを武王風を憎みて目を瞋て罵りたまハバ風の神なる者怒るべき事なり。只一言に天を罵りて唾くとも。これらハかり果するもこゝろえがたし。ぬるき世の常

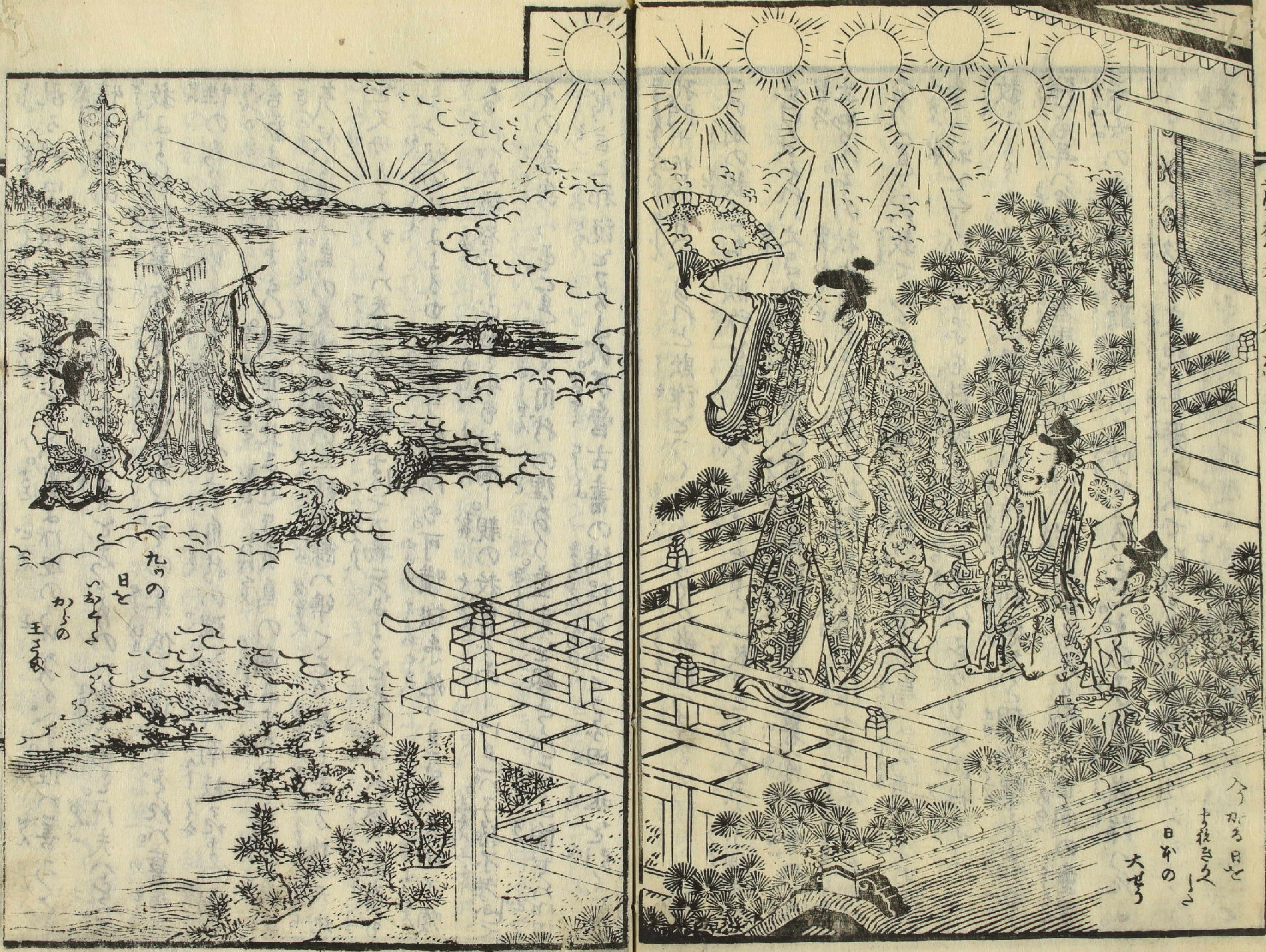
およびがたきに鬱ていふ。武王一身の力をよせて咒を唾しかくとも。その声天までとゞくべきや。風雨にもあふべからず。厄難ハ人の賢不肖によらず。文王ハ美里に囚れ。孔子ハ陳蔡に糧を絶れたまへども。罵て脱れたまふにあらず。啼く児を叱れバいよ〳〵泣。蹶馬を鞭てバます〳〵蹶る。相罵て好文也。辞を安寧にし民を安ずるとハ曲禮の剿説なるに。武王の廣言聖人に似ず。その妄語なるを推てしるべし。むかし日本武尊東夷を征伐したまひしとき。上総国へ渡らんとて既に御舩を出したまへバ。暴風吹荒していとも危く見え給ひしが戈を操麾執て天を罵りたまふとハ聞えず。夫日本武尊の猛き武王に勝ることも遠し。然るにこの君の武威をもて。風波を治めたまハざりしハ原是天災なれバ也。駿河の牧に狩して夷どもが放せし野火を。草薙の劔もて拂ひ退けたまひ。人作の野火ハさもありなん。聖王良将といへども。武威もて天災ハしづめがたし。或ハいふ

魯陽は楚の縣公に楚の平王の孫司馬子期の子所謂魯陽文子これなり楚ハ僭号して王と称せしよりてその縣を守るものハ公と称せり

魯陽公。（魯陽公或ハ魯襄公に作る）韓國と合戦して日暮なんとする程に公戈をもてさし麾けば。その日反ること三舎とせり。或ハ又平清盛安藝の宮嶋を築立さし。已に落成と定めたるに。そのいまだ果さぬにてや日の暮なんとするを恨み扇を抗てさし麾けバ。没る日忽地返りしといふも万八虚談の虚人精誠をもて天に祈る。一点の私なければ。その精誠やうやくに天に通ることもあらんが。魯陽公の日を反し。清盛が日を反せしハ。忠にもあらず孝にもあらず。嗜慾の私を果さんとて。没める日を惜み。百億万遍麾けべしとぞ。日輪いかで返るべき。且日月に分度あり。天に随て運ること昼夜止ときなきものを。聖人精誠もて祈りなすとも。没る日の返るべうもあらず。況て敵と戦て殺伐を恣にし。一身の利の為に宮嶋を造るなんど世の為にせぬ私情をもて天に及さんこと遠からずや。或ハいふ建保七年。正月廿七日の夜将軍實朝公右大臣の拜賀として。鶴岡八幡宮へ詣るに北條義時作劒の役たり。然るに義時夢のごとく白犬一疋走り来て。アブ傍にありと見へバ。心神俄頃に違乱せり。已ことを得ず御劒をバ。仲業朝臣にことをとらせ。伊賀四郎ひとりを召具し。やがて退き出たり。去程に禅師公暁。その夜実朝を犯し奉りて。又仲業が首を斬る。この夜彼義時が作劒の役に候ざるを。公暁ハ謬て志るよしなきに。義時なりと思ひまがへて。仲業朝臣を殺しつり。是より先義時の霊夢によりて大倉が谷に。建立ありし薬師堂なる。戌神その夜忽然と失てえんぞといへも詐説で。義時謀あるく頼家を修善寺の浴室にて。刺殺させし形勢ハ。愚管抄にもこれを記さる。かくて又実朝を失んとて公暁を欺き。父頼家の仇人なれバ右大臣を撃なへ。実朝既に失なバ。鎌倉殿と仰ん君ハ。禅師の外にあるべからずと聴こうへてうまく謀らせ。その夜をこえず公暁を殺してその疑ひを遁ん為に。謀て

薬師堂を建立して戌神を安置し。その霊験といひふれて公暁と同役中なりしと世の人にいはせべき。詐術を諱して虚文と云けりや。義時近属建立せし。戌神の守護によりて必死を脱れしとおもへば八幡宮は正に是源家累代の氏神なるに実朝社参しの夜に八幡大神見殺しに。ましなりしべ情が合。かゝる浮文ども数へ立なば千万言にも尽しがたし夫実録に増言あり。史傳に餝文いと多し。董狐なりねばその時に。佞媚せぬ記者稀なるに。忌く虚文を咎めば。書なきにはしかざるべし。且聖人にも戯言あり。二三子偃之言は是也前に言しは戯之耳。と孔子の仰られし也。又この聖人病のふに家臣ひそもおはさんが。子路気の毒におもひつ。門人をして家臣としゝが病ひの間あるときに之しいりのドや嗚呼由が詐を行ふこよ。そなれは家臣なきものをと仰せられしを見るべし。子路は

孔門十哲の賢人なれど欺詐をつく。凡人ならでは欺詐つかざる人頃日さらけき この國の親たち欺詐を見てはならぬ子どもらに教すとて。ちんみが不理屈いふよげなそれは大きな了簡ちがひ賢ふ育へ教によらば。暮蘭の蔓の春生出るに。その秋大風あるべき年は。おのづから低く這ふ。草木元来非情なれど且つ天教てあるにあらず。鳩に三枝の礼あるも。烏に反哺の孝あるも。鼠が親とならひならぬも。鸚鵡が人の口まねするも。その性なりし。とく教によら次第習せば学問せば三絃習へ剃髪せいと朝から晩まで息勢張ても耳は鉄拔大不器用忘れてはいと早く。おぼえかぬるが世間の童男童女の庸なるに。欺詐ついて叱せらるとて。その子も又欺詐つくに。なると見ゆれば杖子定規。甚麼そんではあるまんぞと罵つけうにしく夏惠兵衛は。見ゆれども大息つく現に紫は朱を奪ひ。鄭声は雅楽を


入かゝる日を
まねきかへしゝ
日本の大せう
九ッの
日を
いおとせし
かうの
王さま

乱る。利口の邦家を覆すとハ真に佞辺のことなるべし。性ハ善なれど情に慾あり。生ながらにして理義をしるものハ聖人のみ。凡夫ハまなびて教によれ。彼薯蕷蔓の風をしりて。その年低く這ひぬれど。それハ薯蕷の性のしるところなれバ。気候によつて自然の理を知。茘枝が南枝花まづ開き合歓木の宵まどひ。鴻雁の北に赴き。玄鳥の南によるも。その比天の気候に随ふ。烏の反哺も。鳩の三枝も。餘ハ準てしり易し。夫万物ハ天地を父母とせり。かくハ天地の気候によりて万物それによると知ば。子の賢不肖もその親の教によるゆゑ孟子の母さへも。可惜機糸絶まじとす。天地不順なれバ五穀登らず草木も枯槁し。親の教育がおしけれバ。子孫不孝にしてその家興らず。これも又自然の理なり。虚実をあきらかに論せバ佞辺寓言と邪説をするなり。只嘗古書の猜惧を挙てわが田へ水を引くはや

めし石なりて玉と偽り。鹿を指て馬といふとも。識者ハこれをしるぞかし父ハ子の為にかくし子ハ父の為に隠るを。かくすと不欺詐に似て直きことその中にあり。兄弟牆に鬩ども外の侮を禦ぐがごとし。是ハ非をかざるに似たれども骨肉乃信その中にあり。孔子の戯言ハ門弟子を勧る為の信にて子路が詐りを師とおもふハ二重にも信の篤きゆゑ。二重より下ハ老子の虚無。仏氏の方便。荘子の寓言孫子の武略淳于髠が滑稽に至るまで。実から出し虚なれバ。味ひなく世に益あり。夫兵ハ凶器なり。戦わで勝を良将とさし。孫子が詭の計ハ人を傷らじとの信なり。老子の説ハ無為をとうとぶ。玄機妙なれバ覚がたし。されどよく是を識とれバ。天窓の蜂を拂ふに足る。荘子の寓言変化に応ぞ。譬喩その実を失へども。よく読ものハ道にちかし。淳于髠が滑稽ハいひまくれどといふてのける。諷諫なれど解易し。[illegible]ていふなんぞ

五月の頃童子の青梅をかぢりありてその母禁んとせしかふ汝も捨ぞ。これ不圖の事を途に見ぞ。わしが隣家のひとへ息子常に青梅を嗜しろが。俄に腹痛してむなしくなりぬ。けふハ七日の逮夜なれバ墓參へゆかんと出るにてふも又青梅を嗜む童のありけれどそれとハなのらふのみと見ゑ。童子見くるが顔とうちまもりて口ふあてる。梅を捨るものハ稀なりしを仏の方便とも。又淳于髡が滑稽とも。孫子が武略。荘周が寓言ともいふぞかし。なつるふ梅を捨させんとて子どもよその梅俺よ事。その代に銭まとりのて賺して取あげて銭と易ほ一バ利となつて導くなれハその子に害あり。又銭をあたへせねバ欺く事を教るさ。さて亦世々の書籍どもふなれをさ記せハ偽字の増言さもあれバ勧懲の為にとて近て巽をとるものゝ博く望とるよしを。仁の端とハ聖もいへるや。戯濾とれども虐となさど。地獄変

相の説なれど現あるべしとハおもハれねど。疑ハざれバ成仏せそ。まつるふと入国ハ胸中一点の信なく。人を欺きて身の利を謀り。讒言邪説をそのとして。口才浮薄。奸智に長。古書の疑しきを穿鑿して。凡慮の決断に任するなんど耳塞でも傍痛し。いにしへの愚ハ愚直なり。今の愚ハ詐るの狡いハ愚かなる馬鹿なれど欺詐を尽さめのハなほしされバ古人ふも偽りのなれ世ふいけり。朴学を円雖が信ようまごころ事しそあけん。暁まくと説破れハ。節了居丈高くなり。ちん身が近づきの聖人どの隠しるを索め。性さを弁ひ。後世に述るもあらんがられらハ世をとひそぎ述て俄せぞ信ぞれハ古を好むなんどいへ人あることを忘まて狭寓言の方便の勧悪のとおのぞ勝手に名ハつくれど。なれさ似つかハしき欺詐なりされ聖人にあらざれバ汝ハ汝が惧説をつけ。されハこれが欺詐をつくるも。欲するに足らん。誇るに足らん。

畢竟虚名の名実のと高下をつけて生老実に。たのんでみても情なや。名のある所へ必利がよるなり利の為に名を好めバ。虚名にも又名実にもいふ品でそろへまし細ものなく。そろまし姉から妹からまけていはれぬ臭の先さよい。と云へバよいで済む。かくいふ爺二郎そのむかし藪醫にありしとき。野鉄炮を一ツならして屁のせうじと卑下せしかバ人ミな甚しく珍重しく。粗忽屋爺二郎藪中みそく屁を放よりと世上の風声是よりして名が高くなりし。好む所に名利を獲て。さゝく生活になるぞし又おん身が旅宿とする。臺野万八の元を元。万八傳に我らまで。思ひの外に人にもしられ。名のある所へ利をよるより。凹でなけれバ水も溜らぬ。業が高いと利も溜れど名といふ吸膏薬で。吸よせきれバ。あけの吹水見るやうに。高いところへ利もそく。名利といふよくいふ其の片輪車ハ轄しかし。虚実ハ車の両輪のごて。生老実あれバ。譃談家あり。良史あれバ稗官あり。董狐あれバ。羅貫あり。仏あれバ衆生あり。三間張あれバ水飴もあり。柳ハ翠花ハ紅のいろいろ。蓼喰ふ虫もおのが好き。三寸不乱の舌をもつて片意地を張り通し。千万言を費しても。この國の人に説ては。ゐるはあるとものこみはさ。ところまちに承知するが。おもそうそるれバいふは先達し。この衣にすそ昔の人も。稼に…の九夷に居らんのと述懐ハ叫えさるに。おん身があるんどう癡頭で。説されバとて喋つくろとそ。歯形もつく國でハなし。凡生さしつゝるりの声あれバからのうだ発き。梅に鶯。蚕屋の蝦蟇も。和歌を詠むとぞ毒の人の放詐。公冶長にあらざれバ。鳥獣の囀声ハ。何といふやら咲ぶ志らねど。日外下の日待の夜檀那さんぐさ藝なし猿下司の話説の屁へすなるも。虚説でなすまいバ。落が来ぞ春の花のめでたよう。造り花を賞翫し

本八丈なりといふかくに上州八丈が口がたやく。鮨の昆布巻より。鯀の昆布巻が多く賣る鰻鱺の蒲焼屋の隣にも。海鰻の糀炙賣る店あれバ。太夫も身揚りする日あれバ夜業のむなしく済る夜ハほし。真を誂の看板なく。似て非なる物を欲ぶも。とかく銭との相談すれバ。うしや晦日に月ハ出るとも。そらで真を聞尺にあへぞ。むかし唐山楚の國に直躬といふものあり。その父羊を竊しかバ直躬これを王に謁ふ。荊王せがてその父を執て誅さんとするを直躬父に代りて死んと請ふて將に首刎まんとするとき吏に告ていふやう。父が羊を竊るを明白に謁せしハ是おのが信ならずや。父に代りて死んと請ふ亦孝行ならずや。信ありて孝あるものを誅しなバやといひしかバ荊王理りありとて終に直躬を赦しける。魯國の先聖これを聞て。異なる直躬が強て信をいふことを。二ハその父の名をとりて。おのが名を取るものなりとぞ。眉うち顰められしとぞ。かくては信なきにあらずぞ。或ハ尾生が女子に契ありて。橋梁の下に俟てござれ。居よといふさへ変易ぞ。されども約ハ来ずなく。待ぬ夕汐が満て来ても。一歩退ても情なしぞや。欲詐つきになれバまんとく。橋梁にあがりつゝ。とうく水ぶくれになりて死でハ。馬鹿正直とて笑ハる。或ハ魯の莊公が。母公の姜氏を恨しことあり。黄泉ならでハ見えじと誓ひしを後悔し。潁考叔が教にまかして。地を堀らせて穴の中にて。親子ふたゝび対面ありしも。舌を二枚つかふと思へ且つ眉をしかめ。穴ありと致されう。諸るの物毎に臨機應変信がよくハよいにもせよ。あまり信に実が入ると。瞽家の一心凝されて。なまなぞしく後悔し。むかし免

はくしき信から。親い友と中たがひ。人を恨るのもあり。されば歌にも。「偽りの。ある世なりけり。神無月。貧乏神は身をもたるゝをぞ。今から欺詐の騙計りして世わたりの稽古を励むものへと云て。もつね返答に。夢想兵衛はまたく呆果。叔孫武叔は仲尼を毀て。嬖人臧倉孟子を讒る。いかさまかゝる馬鹿ものに係りあふは大きな損なり。これ今ひとりの直きに困んで。衆の枉れるものを。醒さんとすれど正直ものと。馬鹿につける薬は無し。比丘尼の髢搔索んより。宿かえせんとおもひくして。その侭外面へ走り出。天を瞻てさし招けば。紙老鴟忽然とまひさがり。夢想兵衛をうち乗せく。またさ空中へひらめき登り。何國となく。飛で行く。

○總評

評に云。邪説の人を傷る。その害虎狼より甚し。されども。君子は義にさとれ。故に害なく。小人は利にさとれ。ゆゑに害あり。人世才に逞しきをと云へバ。これを稱して経済家とし。亦彼浮薄の人をと云へバ。これを稱して磊落といふ。経済世才と混ずべからず。磊落と稱せんものハ。老荘方外の徒をいふべし。これ夫世才に長たると云へるに。経邦済世の才に似ず。これ彼浮薄の人と云へるに。磊落出塵の叟に異なり。理義によること容易からず。人を知ること難くもあるかな。世に荘子の一書を読で。その荒唐をよろこぶものハ。よく荘子を知らざるものなる

あらず。荘子ハ所謂磊落の人。世よりて磊落の人すくなからず。

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之一畢